

# 統一戦線史論

——そのいくつかの問題点

中 林 賢 二 郎

## I 統一戦線の一般的意味

統一戦線の歴史を研究するうえで考慮に入れておく必要があると思われる若干の問題点についてのべるにあたって、まず最初に、「統一戦線」とい言葉の意味・内容を明らかにしておきたい。ここにいう統一戦線とは、一般的にいつて、労働者階級が反動的な支配層とたたかい革命をやりとげるための、労働者階級と人民的諸階層の統一戦線のことである。

こうした統一戦線は、革命の一定の戦略にそつてのみ形成される。もとより、革命を直接の目標としないで、いわば中間的な目標をめざすたたかいの中で、統一戦線が組まれることがあるが、その場合も、革命的な勢力は当然

革命の戦略にしたがつて中間的な目標を追求していくのであり、革命戦略にそつて統一戦線を組織していく。

統一戦線とは右のようなものであり、したがつて、逆にいえば、革命をぜんぜんめざすことのない、単なる改良のための改良をめざす諸派の一時的な連合というようなもの、たとえば、最近、労働組合運動の一部で提唱されている「反共労働戦線の統一」といったものは、ここにいう統一戦線とは無縁のものといふべきだろう。もとより、革命をめざす統一戦線は、何も社会主義革命をめざして労働者階級が他の人民諸党との間に組んでいく場合にだけに、見られるのではない。社会革命にはいつでも何らかの形でそういうことが見られた。

たとえば、ブルジョア革命では、革命はブルジョアジーによつて指導されたが、農民、都市の小生産者層、あるいは都市と農村のプロレタリア的な要素が、積極的に革命に参加した。また、そうした人民的諸勢力が、革命を徹底させる推進力になつた。その場合にブルジョアジーは、社会発展の法則を体系的に理解し、科学的革命理論をもつて諸階層を革命戦線に結集させたというのではない。ただ事実上革命的諸階層を結集・統一し、その力に依拠して革命を成功させたのであつた。

これに対して、プロレタリアートが中心になつて革命的統一戦線を組織する場合には、プロレタリアートは、ブルジョアジーやその他の、歴史上にあらわれてきたかつての革命的階級とは違つて、その統一戦線の課題に、意識的、科学的に取り組むところに特徴がある。労働者階級は、資本主義の客観的な諸条件と社会各層の歴史的、主体的な条件を考慮し、社会を構成する階級と階層のそれぞれが、革命に際して、どのように動く可能性があるかということ、科学的に分析して、革命の側に立つことのできるもの、つまり労働者階級の同盟者を確定して、その獲得のために一貫して努力し、そうすることによつて統一戦線をつくり上げていく。

したがって、ここにいう統一戦線は、非常に意識的、科学的な性格をもっているというべきであろう。また統一戦線は労働者階級を中心にして形成されなければならないから、したがって、統一された労働者階級——労働者階級の統一が必要となる。つまり労働者階級と人民的諸階層の統一戦線の形成には、労働者階級の統一が論理的にこれに先行することになる。以上のことから、労働者階級の統一をやりとげるとともにそのまわりに人民諸階層を統一して統一戦線をきづきあげていくためには、科学的な思想に導かれたプロレタリアートの革命党が、必要となることは、論理的必然である。

しかし、誤解を避けるために、ここで一言次の点を指摘しておく必要がある。それは人民諸階層を含んだ統一戦線ができるためには、論理的には、まず、科学的な社会主義の理論に導かれた革命的プロレタリア党が必要であり、さらに、これの指導の下での労働者階級の統一、あるいは労働戦線の統一が必要なのであるが、現実の統一戦線の形成過程、その実際の歴史的過程では、革命的プロレタリア党の形成→労働戦線の統一→統一戦線の形成は、時間的な系列をもってあらわれるとはかぎらないということである。

たとえば、労働戦線の統一と人民諸階層を含む統一戦線の形成が並行的に相互規定的に発展するということは、歴史的にもしばしば見られたことであり、現在わが国で見られる諸事実のうちにも指摘できることであるが、さらに極端な場合には、革命党の創建、創立の過程が統一戦線結成の過程と並行して進んだ例さえもあげることができ。たとえば、朝鮮の場合がそれで、一九三六年の祖国光復会の成立によって、反日帝の民族統一戦線結成の闘争とプロレタリア党創建の闘争が並行してすすめられている。

したがって、統一戦線形成の歴史を分析していく場合に、プロレタリアートの党の成立とその強化、労働戦線の

統一、統一戦線の結成の三つの観点を考慮に入れながら、それがどういう形で、からみ合つて進んでいったかということを現実には分析しなければならない場合が多い。

## Ⅱ 労農同盟と統一戦線

以上が、統一戦線の基本的な規定であるが、これはきわめて一般的な規定であり、それでは、統一戦線と、労働者階級と他の人民的諸階層との同盟との区別が明確にならない。そこで統一戦線というものをもう一步つっこんで規定しなければならないが、そのさい注目しなければならないのは次の点である。つまり、統一戦線の理論あるいは運動を歴史的な事実としてとらえた場合には、それは一定の時期以後出てきたものだということである。理論としては、マルクス主義が誕生したときから、労働者階級と他の階層との同盟という理論はあつたし、また歴史的事実としての労働者階級と他の諸階層との同盟関係は、その形成のされ方や強弱を問わないとすれば、これもまた存在したといえる。それにもかかわらず、そういうものが意識的に統一戦線の理論として展開され、統一戦線として組織されていったのは、一定の時期以後、具体的にいうならば、一九二一年の一月に、コミンテルンの執行委員会が最初に統一戦線をいう形での問題を提起して以後、のことである。

そのさい提起された統一戦線は、初めは、第一次世界大戦後の独占の立ちなおりに応じて強化された独占の攻撃に対して、それまでの革命情勢の中で獲得した労働者階級と人民の獲得物を防御するという、きわめて防衛的な側面がおもてにでていたが、それだけにとどまっていなかったということは、翌二二年のコミンテルンの第四回大会

で、統一戦線政府の樹立の見通しを含めて統一戦線の問題が提起されたということによっても明らかだと思ふ。

しかし、とにかく一九二一年にコミンテルンが初めて統一戦線という問題を提起し、それ以後理論的にも実践的にもこれを展開していくことになったのであるが、では諸階層の革命的同盟と統一戦線とは、どのように違うのか。

諸階層の同盟という概念やその中心となるべき労農同盟という概念は、革命闘争におけるさまざまの階級並びに階層の間の関係を、それ自体として表現するものである。ところが、統一戦線という概念は同じ内容を、さまざまの階級と階層を社会的、政治的に代表する諸団体や政治的諸流派の間の関係を通してとらえるもので、それだけ現実の政治勢力の存在形態にそくした、実践的な概念であるように思われる。

では、なぜマルクスやエンゲルスはもとより、レーニンも、ある段階までは労農同盟あるいは革命的諸階層の同盟といった形で表現していたものが、一定時期以後統一戦線という形で表現されるようになったのか。それは、一九二一年以後、統一戦線の任務が提起されていった理由がどこにあったかということを探っていくことによって、おのずから明らかになるように思われる。

まず、第一に、一九二一年という年は、一九年に結成されたコミンテルンがその指導下で各国に共産党を建設する任務を基本的に完了した年であった。このことは二一年の第三回大会におけるレーニンの演説に非常に明瞭に示されている。「われわれの第一歩」すなわち第二回大会までの任務、あるいは第三回にいたるまでのコミンテルンの任務は、レーニンの言葉によれば「真の共産党をつくることであつた」。というのは、この当時の共産党は、社会民主主義諸党の左派（国際派）と革命的サンジカリストのうちソヴエト形態によるプロレタリアート独裁を支持した者とが合流して結成されたばかりの時期にあり、その中には、左右のはなはだしい偏向が含まれていて、一方

には中央派と袂別することに躊躇する傾向があり、他方には議会活動や改良主義労働組合内での活動をポイコットするなど、非レーニン主義的な要素が多分に含まれていた。それを真の革命党にきたえあげていくために「左翼小児病」なども書かれなければならなかったのであるが、そうした任務は第三回大会までにほぼ完了した。そこでレーニンは、第三回大会の任務は「みずからを党に組織したのち、革命の準備をすることを学びとることである」とのべた。

そして大会は、建設された党が勤労者大衆とより密接に結びつく必要をみとめて、有名な「大衆へ」のスローガンを採択したのであるが、これにひきつづいて、二一年一二月の執行委員会が統一戦線戦術を提起したということ、意味深いものがある。革命党建設の任務が主要諸国でほぼ完了し、諸階層の同盟を意識的、科学的に追求していくべき中核部隊が各国にできあがったということが、統一戦線結成のための、したがってまたこの課題の提起を可能とするための第一番目の条件であったのである。

第二に、ロシア革命は、レーニンの「帝国主義論」で明らかなように、第一次帝国主義戦争に結びつけてその戦略がたてられていたが、一九二一年の段階では、戦後情勢の下で革命戦略がたてられなければならなかった。しかも戦争直後の革命情勢は失われつつあり、そこでは、戦争末期と終戦直後に見られた労働者と人民の不満の爆発とそれにもとづく多分に自然成長的な運動の高揚に依拠して革命戦術をたてることは許されなかった。したがって革命党は、ロシア革命によって証明された、革命における労働者階級と人民的諸階層の革命的統一の歴史的必然性、そいながら、労働者階級と人民諸層の運動を、より根本的に、より意識的に組織し、これを革命へと準備していくことが必要であった。

第三に、この時期には、コミンテルンはすでにロシア革命の経験をもっていたが、にもかかわらず、そこから結論された革命闘争の方針を、一般的には、全世界的に、だがロシアにおける革命の成果を守っていくためにはとりわけ西欧で、さらに具体化していく必要があった。ロシア革命の方式をそのまま西欧に適用するわけにはいかないという事は、一九二一年までの経験でほぼ明らかにされていた。西欧諸国では、客観的には、革命的危機が戦争直後に存在したにもかかわらず、できあがったばかりの共産党は労働者の圧倒的多数の支持を獲得することができず、改良主義的な第二インタナショナル諸党がその歴史と伝統の力に支えられて、あいかかわらず大きな力をもっていた。革命における諸階層の統一へ進むためには、少なくとも、その党の下部組織、あるいはそれらの社会民主主義諸党の指導下にある諸団体への影響を強めながら、それとの統一行動を組んでいくという問題を意識的に、提起しなければならぬという事情があった。

第四に、第一次大戦後、それまでの時期にすでに一定の発展をとげていた西欧諸国の労働者階級の諸組織が、いつその発達をとげたことはいずれまでもないが、さらにアジアや中近東の植民地・半植民地でも労働運動が進展しはじめ、労働者階級の一定の組織が生まれてくるようになったし、民族解放運動も持続的・恒常的なものへと発展した。そして西欧諸国や植民地・半植民地諸国を通じて、人民的な民主主義運動が高揚しはじめ、それらの一定の組織もできてきた。

レーニンは西欧における労働者階級の諸組織の発達の実に注目して、それを基本的に獲得していくためには、ロシアのようなやり方だけではだめだということを強く指摘していたが、この指摘が植民地・半植民地についてもある程度あてはまるような状態が、この時期には生まれてきていたものといえる。労働組合組織、人民的な民主

主義運動とその組織、それから、プロレタリア党やそれと競合関係に立つ社会民主主義政党的組織が、西欧だけではなくて、それ以外の地域にも広がってきたということは、当然、諸階層の革命的同盟の問題を、現実にも生まれてきた政治的諸勢力ならびに諸派の間の関係を通してとらえていくことを必要ならしめたのであり、したがって、統一戦線という形でそれを把握する必要が出てきたものと思われる。

### Ⅲ 運動の潮の干満と統一戦線

統一戦線の内容を右のように理解したうえで、次に統一戦線史を研究するさいに考慮すべきだと思われるいくつかの問題点について述べてみよう。

第一は、統一戦線と一般民主主義運動との関連にかかわる問題である。

さきに、統一戦線は、労働運動や一般民主主義運動の組織的發展と一定の関連をもって提起されてきたものであることを指摘したが、この労働運動や一般民主主義的な運動と労働運動は一九二一年以後現在まで、つねに一定の干満を見せてきた。それが非常に高揚した時期もあれば、退潮した時期もあった。たとえば、二一年以後は退潮に向かい、それは相対的安定期になると非常に明瞭な退潮期をむかえる。労働運動と一般民主主義運動の潮のこうした干満を考慮に入れないと、統一戦線運動の歴史の理解に障害が出てくる。

一般民主主義運動と労働運動の潮の干満には、革命党の側の意識的な政策や組織活動とはいちおう別個の、客観的過程が含まれている。潮の干満を革命党がどのようにとらえ、どのようにならにそれに対処していくかという問題はあ



るが、にもかかわらず、退潮期にそれを逆転させるなどということは、意識的な指導だけでは起こりえない。そういうことを考慮に入れないで、たとえば、統一戦線の課題の成否をすべて革命党の政策の問題に帰すると、統一戦線問題をめぐる歴史分析に誤りが出てくる。

#### IV 革命党の路線確立と統一戦線

第二は、革命党の「路線確立」と統一戦線の発展の関連の問題である。

一九二一年に統一戦線の任務が提起され、一九二二年のコミンテルン第四回大会で統一戦線戦術が大きくとりあげられ、発展させられた。そして、その後の一時期に統一戦線問題は後退したかに見えたが、一九三〇年代の反ファシズム闘争のなかで、それが再び重要な任務として提起され、かつ現実に統一戦線が結実し発展していく。

コミンテルンの統一戦線政策の歴史は大まかにいって右のような過程を踏むのであるが、この時期における統一戦線の歴史を非常に複雑にし、かつその分析を困難にしているのは、次の点である。すなわち、統一戦線政策の確立、あるいは統一戦線そのものの成立の過程は、その国の革命党のいわゆる路線確立の過程と並行して進んでいる（もしくは路線確立の過程の一側面である）ように思われることである。

ところで、革命党の「路線の確立」とはどういうことであろうか。それは党の創立とどのように区別されるのか。相対的安定期には、各国の革命党は非常に不利な状況のもとで、レーニンが第三回大会で述べた「革命の準備をすることを学びとる」ということをしなければならなかったのだが、さて「この革命の準備をすることを学びとる」

ということの内容は、今日、党の「路線の確立」といわれていることではなかったらうか。

革命党の結成とその党の路線の確立ということを明確に区別して、問題にするようになったのは、中国共産党と朝鮮の労働党であり、日本共産党も最近、路線の確立という問題を口にするようになってきているが、レーニンはそのようなことを使わなかったけれども、同じような考えをもっていたように思われる。

一九一九年、二〇年ごろに、各国に共産党がつけられていくが、これらの共産党がレーニン主義を新しい国際的な条件と各国の具体的な条件にあわせて、戦略方針としていかに具体化していくかということは、その後の各国における革命の実践の中で、一定の試行錯誤の過程を経ながら解決されていかなければならない問題だった。一つの党が創立されたからといって、それがただちにそういう路線を確立するということではなかった。「路線確立」とは、このような革命の実践の中で、試行錯誤の過程を経ながら、解決していくべきものである。

さらにつけ加えていうなら、ソ連共産党も、一見、党の成立と路線確立とを明確に区別していないように思われるが、しかし、事実上これを区別していることは、たとえば次のような方にもあらわれている。一九一七年にロシアでは十月社会主義革命が成功したが、ドイツをはじめいくつかのヨーロッパ諸国では、革命は成功しなかった。なぜ、ロシアで成功して、ドイツやハンガリーで成功しなかったか。それは、ロシアには一九〇五年以来の革命闘争の豊かな経験をもつボリシェヴィキ党があったが、ドイツ、ハンガリーには、そういう豊かな経験をもつた革命党が存在しなかったからである——ソ連共産党史の中でもおこなわれているこうした区別の仕方がそれである。これはロシアにおいては、革命路線——二つの戦術その他で、すでにレーニンが、ロシアの条件に合わせて明確に規定していた——をもつた党があったが、他方にはなかったということを知っているのだと思われる。さらにはそ

の後、コミンテルン第三回大会で、「第一歩は真の共産党をつくることであつた。第二段階は、みずからを党に組織したのち、革命の準備をすることを学びとることである」とレーニンはのべたのであつたが、このレーニンの問題提起のしかたもやはり、党の創建と党路線の確立という問題を区別したものとすべきであらう。

さて、革命党の路線確立は、党の創立によつては必ずしも自動的におこなわれるものでなく、党創建後の闘争の「豊かな経験」——それは同時に労働者階級全体の経験でもある——をつうじて、したがつて、さまざま試行錯誤をつうじて、おこなわれるものであるとするならば、各国の党、あるいはコミンテルンがことに相対的安定期、あるいは相対的安定期に直接つながる時期の数年間に犯したといわれる統一戦線政策にかかわる一定の「誤謬」なるものは、実は、それを積み重ねつつ路線を確立していく過程における、積極的な経験の積み重ね、あるいは積極的な試行錯誤の積み重ねとしての意味をもつていたのではないかという点を考慮してみる必要があるのではないだらうか。もちろん、そうした「誤謬」といわれるものの中には、それが理論化され、理論的なあやまりとして固定化されていったものもあるわけで、「誤謬」といわれるものすべてがこれで合理化されるものとは考えないし、ましてとりわけこの時期のコミンテルンや各国の革命党が無誤謬であつたなどと主張する気は、私は少しもない。が、しかし、国際的国内的諸条件の変化の中で、革命党が、そういう積極的な経験を積み重ね、積極的な試行錯誤を積み重ねていくことによつて、党路線を確立していくという側面があつたのだということを理解していないと、統一戦線戦術や統一戦線運動の歴史を十分に理解できないし、また、その歴史分析から、きわめて清算主義的な、積極的な意味のない結論を導き出してくるおそれがありはしないかということを、指摘したのである。その点を考慮に入れない分析や評価は、たとえば次のような誤りにおちいる。革命路線を一貫して歩むことのない諸派——それ

はこのころ各国の共産党内、あるいはコミンテルン内に現われた分派であるとか、あるいは右や左にそのときどきに揺られていく社会民主主義勢力の中の一定の宗派を指すのだが——そういう宗派のきわめて一貫性のないそのときどきの言動、つまり、右翼日和見主義や極左冒険主義の偏向をもっているがゆえに、特定の点に関する限りではたまたま正鵠を得たかのように見える言動と、革命党がその路線確立の過程で、積極的な意味をもって経験していく試行錯誤の過程やその過程での部分的な誤謬をふくむ言動とを、並列的に見て、その甲乙を論ずるという誤りを犯す可能性が出てくる。したがって一口でいえば、清算主義的な評価になり、実践的には、きわめて一面化された結論を導き出す。「一面化された」というのは、右翼的であつたり、極左的であつたりということで、歴史分析として正しくない結果に落ちいることになるのである。

## V 「主要敵」と統一戦線

第三は、主要敵と統一戦線の関連にかかわる問題である。

統一戦線が革命戦略にそつて組織されるものである限り、主要敵が何であるかによつて、統一戦線政策の全内容が規定されてくるのは当然のことである。したがって、主要敵の規定と統一戦線政策の内容とは、きりはなすことのできないものである。

ところで、これは統一戦線の政策というものが一般民主主義運動の発展を一つの契機にしながら生まれてきたということと直接関係があることであるが、いまソヴェトの研究あるいは理論で、次のことが非常に強調されている。

すなわち、統一戦線を実現するためには、ブルジョア民主主義体制が、ブルジョア独裁の一形態であることを評価するとともに、そのブルジョア民主主義体制のもとで確保される、民主主義的な自由、あるいは民主主義的な諸権利というものを、正しく評価して、それを擁護拡大する闘争を社会主義をめざす闘争の一部として、重視していく必要があるということが、強調されている。そのことはそれ自体としては正しいことであり、反対する理由は何もない。事実、民主主義的自由の一切を圧殺するファシズムに対して、反ファシズム統一戦線をつくりあげていく場合に、そのことはことに強調されなければならないことである。また、第二次大戦でファシズムはほぼ打倒されたが、今日、資本主義世界では、形のうえでブルジョア民主主義体制がたもたれていながらも、国家独占資本主義体制が強化されていく中で、労働者階級あるいは人民のもつ民主主義的な諸権利が、次つぎに制限・剝奪されていく。そういう中で、ブルジョア民主主義体制のもとでの民主主義的な諸権利の擁護・拡大という問題が提起されるを得ないし、その問題は現代の統一戦線の重要課題の一つであるだろう。

さらに、このブルジョア民主主義体制の下での民主的諸権利の評価の問題と一定の関連をもつものであるが、運動主体に関しては、社会民主主義運動の再評価がおこなわれている。社会民主主義政党というものは、全体としては小ブルジョア民主主義の党である。その指導部の政策は、独占と非常に密接な関係を持ち、独占の意向にそう傾向が強いが、社会民主主義運動の社会的な基礎の少なくとも中心的な部分は、労働者階級である。しかも、民主主義的な自由とか、議会制民主主義というものの存否は、その党の存否にかかわる問題である。したがって、その指導部や上層が独占資本やそれを代表する政党および官僚機構と緊密な関係を持ち、支配体制の中に組み込まれていくにしても、社会民主主義運動には、常に下から労働者階級のもつ階級性が浸透していくという側面があることを、

見落とすわけにはいかない。つまり、社会民主主義というのは、一面的に規定することができない、二面的な性格をもった中間勢力と規定されるべきであつて、ブルジョア民主主義の抑圧が強められる条件のもとでは、そしてまた労働者と人民の運動が強化されるという条件の下では、当然それが統一戦線の側に加わってくる可能性は強くなく、というのである。

こうした社会民主主義の二面的な性格を正しくとらえるという方向は、現実には反ファシズム統一戦線の結成が問題になったときからでてきたことであり、こうした社会民主主義に対する評価が、反ファシズム統一戦線を可能にした一つの大きな要因であつて、それが今日にひきつがれ、再確認されているのである。

確かに、一九三五年の第七回大会にいたるまでの時期には、コミンテルンはブルジョア議会制の本質がブルジョア独裁である点を強調し、そのもとでの民主的自由のもつ重要性を強調することが少なかつたし、一九二九年の第一〇回プレナムのためにラピンスキーが準備したといわれる社会ファシズム論は社会民主主義についてきわめて一面的な評価——資本主義の全般的な危機の深化に应じて社会民主主義は必然的にファシズムに移行するという一面的な理論化をおこなつていた。

しかし、それだからといつてそのことだけをもつて、一九三五年の第七回大会までのコミンテルンの理論と政策はまったく間違つていたのだというふうには、簡単にいつてしまうことができないのだらうか。情勢の変化、とりわけ国際労働者階級運動の主要敵の問題と関連させることなしに、そのような評価をすることが可能であらうか。

歴史の実際の経過を振り返ってみると、ブルジョア民主主義体制のもとでわれわれがもっている民主的自由の重要性の強調、したがつて、同じブルジョア独裁の形態でありながら、ファシズムとブルジョア民主主義体制とは、

別のものであって、この形態の違いは決して単なる形態の違いには終わらないのだという、その差別の強調や、あるいは、社会民主主義政党の二面性を認めてこれを統一戦線勢力として評価していくことは、決して何かア・プリアリな哲学的認識の変更から生まれたというようなものではない。やはり、一定の諸条件の変化によって、その点を強調する必要が生まれてきたことを契機にして、そうした理論が展開されるようになったのであり、また今日もそのような側面を強調すべき客観的条件が存在しているから、同じことが強調されているのであろう。

では、一九三〇年代前半の時期における「客観的条件の変化」とは何か。ファシズムの台頭がそれであることはいうまでもないが、けつしてファシズム勢力の台頭一般といったものでない。それは、ファシズム、とりわけドイツ・ファシズムが、労働者階級にとつての国際的な主要敵と規定されるようなところまで台頭し、帝国主義陣営がファシズム陣営と反ファシズム陣営の二つのグループに分化しはじめた（もしくは、分化する現実的可能性が生まれた）ということではないだろうか。コミンテルンが民主的自由や社会民主主義に対する評価の力点を変えたのは、こうした客観情勢の変化、新しい主要敵の出現を契機にすることだったのではないだろうか。

ところでいま、労働者階級にとつての「国際的な主要敵」という言葉ができた。この言葉は現在でこそ必ずしも耳新しい言葉ではなくなっている。が、しかし、実際にこうした「主要敵」が歴史の舞台に姿をあらわしたのは、そしてまた、各国の革命党がこれをそのようなものと認め、そうすることによって自国の革命路線をこのことを考慮しつつ定めてゆくようになったのは、一九三〇年代の半ば以後のことだということ、ここであらためて想起する必要があるだろう。

たしかに、レーニン主義のもとでは、革命は常に、国際的、世界的観点から、つまり、世界革命という観点から

提起されてきた。それを国際主義というようにいつてもいい。革命が、帝国主義戦線のもつとも弱い環をプロレタリアートが突破する問題として考えられていたという点からも、そのことは明らかである。また十月革命の成功を見たあとで、ソ連の擁護が国際プロレタリアートの任務であると考えられてきたのも、一貫して革命が世界的・国際的な視点から考えられていたことを示している。しかし、それにもかかわらず、一九三四年までは、革命勢力にとっての国際的な主要敵というものを明らかにする条件はなかった。だから、各党あるいは各国の労働者階級は国際主義の立場に立ちながら、もっぱらそれぞれの国の諸条件の分析にもとづいて、革命戦略をたてていたし、それでよかった。コミンテルンの初期に、各国社会の歴史的発展段階にしたがって、こういう国ではブルジョア革命を社会主義革命に強行的に転化するのだとか、この国では直接社会主義革命だとかというように、革命の型を、それぞれ規定していくというやり方がやられていたが、国際的な主要敵ということは問題にされなかったのである。

だが、一九三四年の初めから帝国主義陣営がファシズム陣営と非ファシズム陣営の二つの陣営に分化し始める。いや「分化し始める」というのは間違いで、国際労働者階級が正確な路線でたたかっていくならば、そのように分化していく、現実的可能性があらわれてきた、というべきであろうが、その際にドイツ・ファシズムが国際的な主要敵として浮かび上がってきた。事実コミンテルンは一九三五年の第七回大会でドイツ・ファシズムを「国際的な主要敵」と規定する。コミンテルンが「国際的な主要敵」なる概念を使用したのは、一九三五年のこの大会が最初のことである。そしてこのときから各国の革命勢力は、この国際的な主要敵との闘争という国際的な任務と、自国の革命の任務とを統一的に把握して、それを戦略・戦術に具体化していくこととなった。しかもこのドイツ・ファシズムを中心とするファシズム勢力に、当面の打撃の一切を集中していきながら、その中に自国の革命の任務を含ま



せていく、あるいはそういう国際的な任務と自国の革命の任務とを統一的に把握しつつ、戦術を展開していくという際に、社会民主主義勢力のもつ二面性、したがってその統一戦線への参加の可能性や、あるいは、ブルジョア民主主義体制内における民主主義的自由の拡大・擁護の任務という点を強調する必要があるが、とりわけ明瞭に浮かびてきたのだと思われる。

## VI 第一三回プレナムと第七回大会

右にのべた、コミンテルン第七回大会におけるブルジョア民主制下の民主的自由と社会民主主義とに対する新しい評価が、国際情勢の新たな発展、それによるドイツ・ファシズムという国際的な主要敵の出現を契機にして生まれていることは、一九三三年一二月のコミンテルン第一三回プレナムとその後わずか一年半余りのちの一九三五年八月に開催された第七回大会の記録が、明らかに示しているところである。

しかし、そのことを述べるまえに、まず次のことを指摘しておくべきだろう。

第一に、第一三回プレナムは、第七回大会への過渡をなすプレナムであったということである。

周知のように第一三回プレナム（執行委員会総会）は、一九三三年の一二月に開かれた。それは、第七回大会前に開かれた最後のプレナムであり、第七回大会の召集をきめたプレナムでもあった。注目されるのは、ファシズムに関する古典的な規定について確立したのが、第七回大会ではなくて、このプレナムであったということである。第七回大会の報告でデミトロフが明確に述べていることであるが、「ファシズムは金融資本のもつとも反動的なもつ

とも排外主義的な、またもつとも帝国主義的な要素の公然とした暴力的独裁である」という規定は実はこの第一三回プレナムでおこなわれたのであり、それが、そつくり第七回大会に引きつがれたのである。

第二に、政策的には、「下からの統一戦線」といわれるそれまでの統一戦線政策についての修正が、この時期にすでに始まつており、しかもその緒についた修正を、第一三回プレナムが肯定していることが注目される。

運動の新しい芽、たとえば、フランスなどに芽ばえていた統一戦線への動きを、ピアトニツキーたちがこのプレナムでつぶしてしまったというようなことが、一般に流布されているが、一三回プレナムでの報告をまともに読めば、必ずしもそうはいえないはずである。もちろん一三回プレナムは、基本的には、社会民主主義諸党との統一戦線ではなく、社会民主主義労働者とのいわゆる「下からの統一戦線」の立場をとっている。社会民主主義幹部は統一の相手ではなくて、社会ファシストとされ、そこには「社会ファシズム論」の規定が強く生き残っている。にもかかわらず、たとえば、一九三三年の三月六日には、コミンテルンは、すでに各支部に対して次のような呼びかけをおこなっている。「ドイツ労働者階級に対するファシズムの攻撃が世界の全反動勢力を勢いづけていることを考え、社会民主主義諸党を通じて、社会民主主義勤労者大衆との統一戦線を樹立するよう努力すること」。

さて、「社会民主主義諸党を通じて」「統一戦線を樹立するよう努力する」ということは、「下からの」統一戦線政策を実践的に否定することを意味するが、この呼びかけをおこなったことについて、クーシネンは一三回プレナムで、次のように述べている。「ポリシエヴィキの路線を追求するかぎり、いかなる状況のもとでも、社会民主党や改良主義的労働組合の指導機関との統一戦線を提起することは、できないということになるだろうか。しかしわれわれの回答では、ポリシエヴィキの戦術にはそのような原則はない。本年の春、コミンテルン執行委員会幹

部会は周知の公開状をすべての社会民主主義諸党に送った。これは正しくなかったか。もちろん、正しいことであつた。そしてプレナムはクーシネンの報告「ファシズム、戦争の危険性と各国共産党の任務」を採択し、「上からの統一戦線」政策を事実上肯定した。したがつて、基本的にはまだ「下からの統一戦線」といわれる方式が政策としてかかげられているのだが、実践的には、それを乗り越えた新しい統一戦線政策への一步がこのプレナムで推進されたのであつた。

第三に注目されるのは、このプレナムは、すでにのべたように第七回大会の招集を決定したプレナムであつたといふことである。第七回大会ははじめ一九三四年中に開催が予定されたが、事態の推移からして、そのようにとは運ばないで、三五年まで引き延ばされることになる。だがそれにもかかわらず、三四年の六月から八月にかけて、大会準備委員会が開かれて、そこで第七回大会で論点となるべき問題が討議され、第七回大会以後コミンテルンのとるべき基本的方向が打ち出されている。つまり、社会民主主義との統一、社会民主主義諸党との統一戦線の結成は可能だとか、その他重要な第七回大会であつたとまでも問題にされるような内容を、そこでデミトロフが提案して、それが準備委員会で肯定的に採択されていく。したがつて、その前の年の一月から、わずか半年たたないうちに、第七回大会に向かつての基本的な方向が打ち出されているといふことになる。

以上の三点からいえることは、一三回プレナムは第七回大会への「過渡」をなす会議であつたといふことであり、一三回プレナムと第七回大会との間に「断絶」だけを指摘するのは誤りであるといふことであろう。そしてこのことを明らかにしたうえで、次に、以下の問題があらためて問われなければならない。

第一三回プレナムは第七回大会への過渡をなすものであり、さまざまの点で第七回大会へと接近しつつあつたの

だが、それにもかかわらずブルジョア民主主義や社会民主主義に対する評価については、第一三回プレナムと第七回大会の間に、なぜあれほど大きなへだたりがあり、したがって第七回大会で基本的ともいふべき転換が見られたのか。周知のように第七回大会では、ブルジョア民主制とファシズムの二つがともに、ブルジョア独裁であることを指摘しながらも、この二つを明確に区別する必要を強調したが、第一三回プレナムでは、その区別を強調していない。またそのことと関連があるのだが、社会民主主義についての評価も、やはり大きく変化している。こうした変化が、何を契機にして起こったのか。一九三三年の第一三回プレナムの時期のコミンテルンが第七回大会の政策へと近づきつつも、基本的には転換にふみ切ることがなく、それでいて、一九三四年半ば頃の第七回大会準備委員会の時期には、すでに「転換」へと踏み切っている。その理由はどこに求められるべきであろうか。

すでに指摘したように、この点についてコミンテルンの文献は、それが国際情勢の新たな発展に求められるべきであることを、明瞭に示しているように思われるのである。

一九三三年の第一三回プレナムの時期までは、国際情勢に関するコミンテルンの評価の特徴は次の点にあった。それはまだ、ファシズム陣営と非ファシズム陣営への帝国主義陣営の分化を認めていない。その時期における戦争の危険性は、具体的には、帝国主義の包囲下にある唯一の社会主義国としてのソ連に対する帝国主義の側からの攻撃の危険性——しかもファシズム国と非ファシズム国の双方の側からの攻撃の危険性であった。イギリスも日本もドイツもともに、ソヴェトに対して戦争を準備しており、実際にその可能性があるものと見られていた。

ところで、ファシズム諸国も非ファシズム諸国も同じ帝国主義としての本性にもとづいて、ともにソ連に対して戦争をしかけてくることが予想され、その危険とたたかって社会主義をまもることが国際プロレタリアートの任務

であるときに、その戦術は、どのようなものでなければならぬか。それは、帝国主義の対社会主義侵略戦争を防ぎ止めるたたいと各国における革命闘争とを結びつけていくことになるが、その際に各国のプロレタリア党は、ファシズムと議会制民主主義の形態の違いに力点を置くよりは、ともにそれらのものが侵略的本性をもつ帝国主義国であり、ブルジョア独裁の一形態にすぎないということを強調せざるを得なかつただろう。

また、社会民主主義勢力、ことに帝国主義諸国の社会民主主義勢力の指導部は、この時期にはほぼその国の帝国主義勢力のとの基本方向にかねらの国際政策を合わせていったから、もしも対ソ戦争にファシズム、非ファシズム諸国がともに加わってくるのが当面の主たる危険性であるとするならば、その際には、社会民主主義諸党との統一戦線という政策は非現実的であり、革命党は社会民主主義的勤労者との統一という政策をかかげざるをえなかつただろう。

要するに、一方でブルジョア民主主義のブルジョア独裁として本質を暴露することに力点をおくと同時に、社会民主主義に対するかなり激しい批判・攻撃が、表に出てこないわけにはいかなかつた。

ところが、一九三三年の一二月の第一三回プレナムが終わったその直後から、国際情勢に新たな変化があらわれ始める。その時期までは、帝国主義諸国はそのブロックの再編成にとめつつも、そのなりゆきは混沌とし、ブロック化について一定の方向をしめしてはいなかつたが、三四年の初めから二つの陣営への分化の傾向を新たに示しはじめたことは、何よりも第七回大会でのエルコリ報告が認めているところである。このファシズムと非ファシズムの二つの陣営への分化の端緒となつたのは、三四年二月の二つの事件である。この三四年の二月にドイツとフランス・ポーランドの間の協定が結ばれたが、また同じ二月にフランスでは、スタヴィスキ事件をきっかけに

したファシズムの攻勢に対して、労働者階級の側が反撃に出て、人民戦線への第一歩を踏み出したのであった（だが、もとより二つの陣営への分化が、このあと自然成長的に進んだのではない。その現実的可能性を確認した国際プロレタリアートが、その政策の中でこの可能性を十分に考慮にいられて闘争をすすめたことによって、その分化は促進されたのであるが、すべての闘争の結果がそうであるように、この分化の過程はジグザクのものであった）。

ところで、帝国主義勢力の、ファシズム陣営と非ファシズム陣営への分化を基本的な傾向と認め、これを促進する方向で国際プロレタリアートの政策がたてられることになる、第七回の大会以後強調された面に、当然、力点が置かれていかざるを得ないだろう。したがって、第一三回プレナムと第七回大会の民主的自由と社会民主主義に対する評価のちがいは、この国際関係の新たな発展——いいかえれば、帝国主義陣営がファシズムのそれと非ファシズムのそれの二つの陣営に分化しはじめ、革命勢力にとつての国際的な主要敵が明確にされたかどうかということが、分岐点になっているのであって、こうした条件の変化と無関係に、何かア・プリオリな思想上の問題としてこれを考えていくならば、歴史的事実を見あやまることになるだろう。

最近、ソ連のB・レイプゾンとK・シリーニャによる「コミンテルンの政策転換」という著書が邦訳された。

これは第七回大会におけるいわゆる「転換」をくわしく論じたものであるが、それは、いまのべた国際情勢の新たな発展、国際的な主要敵問題と、その「政策転換」とを、まったく切り離してしまった典型的な例の一つといえる。

そのため、それはものを一面的にしか見ることができず、第七回大会の方針の正しさを主張すればするほど、第七回大会以前の政策の一切を否定することになり、また路線確立の過程の重要性をも否定することになって、結局

清算主義的な見解におちいつている。だが、このように歴史を抽象的に把える目が、現在の問題に向けられたときには、その結果はさらに深刻なものがあろう。国際労働運動の歴史においてその政策の変化と国際的な主要敵の関連を見失うならば、当面の運動についても、この二つのものの関連を見失うことになるからである。

現在、国際労働者階級運動が、コミンテルン第七回大会やそこでの方針を軸とする反ファシズム統一戦線運動の経験から学ぶべきものは、多々あるにちがいない。それはまた筆者も確信するところであるが、しかし、そのさいには、一九六〇年代は一九三〇年代ではないということが、明瞭に意識されていなければならない。一九三〇年代には国際的な主要敵はドイツ・ファシズムであり、反ファシズム統一戦線に結集してたたかうことが国際労働者階級の任務であったが、一九六〇年代の今日では、国際労働者階級の当面の主要敵はアメリカ帝国主義であり、国際労働者階級はとりわけアメリカ帝国主義のベトナム侵略に反対する国際統一戦線に結集する任務を課せられている。このちがいを明らかにすることによつてはじめて、反ファシズム統一戦線の経験も、現在に生かすことができるのである。だが、コミンテルン第七回大会の「転換」を、国際的な主要敵の問題と切り離して理解するならば、そこで採択された方針や闘争の経験からひき出される結論を今日に正しく生かす道はとざされてしまう。そして、反ファシズム統一戦線の「教訓」は、たんなる教条と化し、国際的な主要敵との闘争を回避するための日和見主義理論の支えにさえなりかねないであろう。

〔後記〕これは一九六七年一〇月労働運動史研究会の小委員会で筆者がおこなった報告の速記に多少の筆を加えたものである。紙数に制限があるために、抽象的にしかのべられなかったが、第一三回ブレナムについては、くわしくは拙稿「コミンテルン第一三回ブレナムの資料について」(法政大学大原社会問題研究所「資料室報」一二五号、一九六六年一二月)を御覧いただきたい。